

白氏文集の成立

- 一 長慶集の編定……撰集の始め―自撰の詩集―元稹による「長慶集」の編定
- 二 後集の續成……整理の再開―「白氏文集」の形成―「後集」の編成
- 三 大集の成立……「續後集」の追加―「大集」の完成―「白氏文集」の成立

花 房 英 樹

一 長慶集の編定

一

僕れ始か生れて六七月の時、乳母抱きて書屏の下に弄むる。無の字と之の字を指して僕れに示す者有り。僕れ口もては未だ言ふこと能はずと雖も、心には已く默識しぬ。後此の二字を問ふ者有りて、十たび百たび試す其ありと雖も、而も之を指して差はず。(那波本、卷二八與元九書、舊唐書は①無を之に作り②之を無に作り、③雖の字無し。)

樂天白居易(大歴七年772會昌六年846)は、その半生の文學的自敘傳をかうした言葉で書き起してゐる。まこと恵まれた資質をもつて彼の人生は始まつたのである。

五六歳に及び、便に詩を爲るを學び、九歳にして聲韻を諳んず。

とも續けてゐるが、天賦の才能は活潑に動き出し、十歳に至らずして早くも作詩の技術に習熟したのである。年十五にも達すると、獨得の風格が形成され、文名をもつて鳴る顧況(820?)を歎稱せしめたとも傳へられる。

この頃、進士の學試のあることを知り、それを目標とする勉學が始められ、

二十已來、晝は賦を課て、夜は書を課て、間に又た詩を課て、寢息に違あらず。口や舌には瘡が成き、手や肘には胝が成きるに至る。(文苑(英) 華は息を夜に作る)

といふ激しい努力が続けられた。もとよりその周圍には志を同じくする若い一團があつた。當時を回想してものした「醉後、筆を走らせて劉五主簿の長句の贈に酬ひ、兼ねて張大、賈二十四先輩昆季に簡る」(卷二二、(注)本は(天を太に作る))といふ詩に記される人々である。時に「秋燈の夜には聯句の詩を寫し、春雪の朝には煖寒の酒を傾け」つゝも、「心には時を後すことを畏れて同じ志を勵まし、身は前の事に牽かれて各々名を求め」てゐた。

貞元十五年(799)、居易は宣州の郷試に及第し、直に省試の爲に長安に向つた。翌年正月、それまでの作品群の中から、「雜文二十首、詩一百首」を選び、書簡とともに人に寄せた。この人を Arthur Waley 氏は Chên Ching と定めてゐる(The Life and Times of Po Chu-i, 1949)。陳京を指すのであらう。その「陳給事に與ふる書」(卷二七、與、(英)は上)にはかうも記してゐた。

居易は鄙人なり。上には朝廷に附離く援無く、次いでは郷曲の吹煦ぐる譽も無し。然らば則ち孰の爲にして來れるや。蓋し仗る所は文章のみ。望む所は主司の至公のみ。今禮部高侍郎、主司と爲りて則ち至公なり、而して居易の文章、進む可きか退く可きか、切に自ら之を知らず、進退の疑を以つて決を給事に取らんと欲す。(「英」は(英)の眼を嚙に、(2)切を親に作る。)

時の知貢舉である高郢(740—811)は、擧に應ずる者の「朋比に務め、更て相に譽薦し、以つて有司を動かす。」といふ、それまでの風氣を深く憎み、一變しようとして固く「請託を謝絶し」(新唐書卷一六五)てゐた。だが權貴の門には「調を請ふ者林の如く、書を獻する者雲の如し。」といふ事態は續いてゐた。推擧を望む者は絶えなかつたのである。さうした中でひとり居易のみは異つてゐた。ただ自己の文學の評価を求めてゐるのである。高郢には「經藝を用つて進退を爲む。」といふ明確な方針があつた。「經藝」とは、六經といひ六藝といふ經書のことである。高郢の人物評價の基準は、經書の指示する理念的な世界觀を會得し、そこから具體的な事象を判斷し、さうした判斷を傳統的な文學形式に表現化し得る能力であつた。居易は自己の文學が果してさうした基準に於いてもなほ價値的であるか否かを、この「天下の文宗」に問ふてゐるのである。だが、そこには既に自己への肯定があつた。權貴の援引もなく地方からの推輓もない一介の書生に過ぎぬと言ひ切り、據つて立つものとしては自己の文學のみであると宣言してゐるのはさうした心情の故である。居易は自己の才能に對して厚く信賴してゐた。しかもここで否定されれば「甘心して退

き藏れん。」と述べ、仕官の志を抛つ決意のほどを閉めかせてゐた。ただならぬ氣魄である。詩文はそのやうな態度で産出され、選集はこのやうな心情に成つたのである。最初の文集はこの行卷のことに於いて編纂されたのである。時に居易は年二十九であつた。その當時までに類ひ少く長い文學的生涯と、比べるものもない龐大な文集とは、かうして始まつたのである。

二

二月、高野の下で試みられた時、詩に於いて「穎に潛むも傍く遠る應く、眞を藏くものは豈で上べに浮さんや。玉人如し見ださざれば、淪棄せられし即ま千秋ならん。」(卷二玉水記方流、見、[美]は記。)と結んでゐるが、そこには自己の主張と、高野への期待が流れてゐる。この文學に對する信念は、省試に一擧及第した後は、ひたすらに制作へ向ふ。だが、「第に擢ぼりて名方て立ち、書に耽つて力未だ疲れず。鉛を磨きて重ねて剝り割き、蹇に策つて再び奔り馳せん。」(卷二三敏德書情四、十韻上宣歡崔中丞)と、宣州の長官である崔衍に推舉のことを謝して寄せた頃には、次の「試判拔粹科」への決意はなつてゐた。その準備の一つとして「一百首の判」(卷四九・五〇)も制作されたのである。貞元十八年(802)の春、見事合格し、直に校書郎を授けられた。「三句に兩のみ省に入り、因りて頑疏を養すを得たり。」(卷五常樂里閣、居偶題十六韻)と詠ひもするやうに、一ヶ月に二十日の勤務には十分な餘暇があり、同時及第の元稹や崔元亮などの交友も楽しみ得るものであつた。詩作は快適な生活の上に限りなく伸びて行つた。當時既に詩は「三四百」(興元九世)にも達してゐたのである。さうした間にも徐々に最後の段階への準備は進められてゐた。元和と改元されたその年(806)、居易は憲宗の親試に應ずべく全力を傾注した。「兩衙に假を請ふこと多し、三考に資成んと欲へばなり。」(卷一三代書一百韻寄微之、①假、②資、③欲、④是、⑤是、⑥是、⑦是、⑧是、⑨是、⑩是、⑪是、⑫是、⑬是、⑭是、⑮是、⑯是、⑰是、⑱是、⑲是、⑳是、㉑是、㉒是、㉓是、㉔是、㉕是、㉖是、㉗是、㉘是、㉙是、㉚是、㉛是、㉜是、㉝是、㉞是、㉟是、㊱是、㊲是、㊳是、㊴是、㊵是、㊶是、㊷是、㊸是、㊹是、㊺是、㊻是、㊼是、㊽是、㊾是、㊿是)と記すほどの努力であつた。だがそれにも満たずして、元稹とともに「上都の華陽觀に退居して、戸を閉ずること累の月」(卷四五、策林序)、「文を攻めて朝に屹屹たり、學を講ひて夜も孜孜たり。」(卷一三代書一百韻寄微之)といふ準備を續けた。その時用意した對策は、七十五目八十首の多數に上つてゐた。遂に「才識兼ねて茂に、體用に明らかなる科」(卷三)を突破した。あらゆる關門を一たびで通過した居易は、いま高い學識として認容され、時代の選ばれた人となつたのである。そのやうな意識は、塾屋の尉といふ地位とともに心情を解放し、幾多の作品を産出した。あの「長恨歌」(卷二)もその一である。翌二年、一勅を奉じて制書等を試みらるゝの五首(卷三)によつて翰林學士を授けられた。それは王者の命言を代つて述べる職掌である。幾度かの試練を経て、その文筆は政治に参加し、時にはそれを左右するものともなつた。その初めの自負を支へてゐた才能は、この方向に展開して行つたのである。だがそのまゝで満足すべくもなかつた。三年、左拾遺に除せられと、制詔の起草や諫紙の直言の外に、一群の詩が制作された。「君の爲に、臣の爲

に、民の爲に、物の爲に、事の爲にして作り、文の爲にしては作らず。」といふ、立場に立つ「新樂府五十首」(卷三・四)や、「聞見の間、悲く足き者有り。因に其の事を直歌す。」(直歌、(略)といふ、態度の明かな「秦中吟十首」(卷二)などの作品である。この前後こそ、居易の生涯に於いて最も緊張した一時期であつた。やがて元和六年、京兆の戸曹參軍に出で、暫くして母の死に會ひ、渭村に退居した。身分の上では公人から私人への移動であり、環境の上では都市から田園への變化であつた。自由と孤獨とは居易を文學へ驅り立てる。もとよりそれは以前とは色合の異つた文學であつた。「陶潛體に效ふ詩、十六首。」(卷五)に代表されるやうな生活觀照のそれである。

これらの作品は、時々整理され、徐々に卷軸に收められてゐた。かつての對策八十首は、「次でて之を集め、分ちて四卷に爲り、命けて策林と曰ふ。」(策林)と序せられてゐるやうに既に一部の卷軸とされてゐた。「新樂府」や「秦中吟」も一時の制作ではないとしても、序文が附され、配列に構成が見える所よりすれば、早くも既に整理せられてゐたものである。元和五年(810)、元稹が江陵に貶謫された時、居易はその出發に當つて、「一軸の新詩を奉げ、執事に致け」(卷三和答)てゐるが、近作も卷軸に收められてゐたのである。その後の、「元九を憶ふ」(卷一)詩の、「近來の文卷の裏、半ばは君を憶ふの詩。」といふ句にも、制作時期からさほど隔たらぬ間に、一應の整理が行はれ、卷軸に定着されてゐた趣が窺はれる。詩文の草稿はかうして徐々に定稿となり編成されつゝあつた。それは一つの文集として統一的に編纂される準備にも似てゐた。

元和九年、服喪の期が過ぎて長安に喚召され、太子左贊善大夫を授けられた。翌年正月、唐州の事に従つてゐた元稹も召還されたが、遂に中央へ留ることを許されず、三月再び通州の司馬に出された。元稹は通州へ着任すると直に「詩に敘して樂天に寄する書」(元氏長慶集)を認めた。その中に、「適々河東の李明府景儉に値へり。江陵に在りし時、僕れの詩章を僻に好み、解し能ると謂ひ爲して、盡く取りて觀覽するを得んと欲ふ。僕れ因に撰して卷軸を成す。」といふ文字が見えるから、既に江陵に在つた時元稹は詩集を編纂してゐたのである。この「二十卷」の詩集は、「昨に京師に來りし時、偶々篋篋に在り。通への行に及り盡く足下に置く。」と記してゐるやうに、離京草々の際、居易の許に留め置かれてゐたのである。やがて八月、居易も越權の責を問はれて江州の司馬に左遷された。途上、「舟中にて元九の詩を讀む」(卷一)といふ一篇を作り、「君が詩卷を把つて燈前に讀む、」と詠ひ起してゐるが、その詩集は彼とともに江州に持ち來たされたのである。「鹽櫛、食寢を除く外、餘事無し。因りて足下の通州に去りし日、留むる所の新舊文二十六軸を覽る。卷を開けば意に得ひ、忽も會面せし如し。」(卷一)といふ心情から、元稹の「詩に敘して樂天に寄する書」に應へて、この文字を含む、「元九に與ふる書」を綴つたのである。國立中央研究院で白氏長慶集研究に當つてゐる

た岑仲勉氏は、この書簡の制作時期を元和十年から十二年の間と判定してゐるが(歴史語言研究、所集刊第九本)、早くも陳振孫が白文公年譜で指摘してゐるやうに(在立名類、訂本所載)、元和十年であることに紛れはない。更に言へばその年の十二月である。この書中に、

僕れ數月より來(このかたつづら)、囊裏(つづら)の中を検討し、新舊の詩を得りて各々類を以つて分ち、分ちて卷目を爲す。(①裏、「馬」本は裏に作り、「舊」は秩に作る。②目、「那」は首に作るも「英」「舊」の目に作るに従ふ。)

と記してゐる。江州に至つてから居易もまた詩集の編纂を始めたのである。

凡て十五卷と爲す。約八百首なり。異時相ひ見えば、まさに盡く執事に致く當し。

と語を續けてもゐるから、この書簡の直前に完成してゐたのである。詩集は約八百首を収め、十五卷から成つてゐた。「異時相ひ見えば、まさに盡く執事に致く當し。」と言ふのは、書簡が元稹のそれに應ずるものであるやうに、詩集も元稹のそれに應ずるものだからである。とすれば、元稹の詩集の編纂に刺戟されて、居易もこれまで部分的に整理してゐた巻軸を綜合統一したのである。第二次の自撰集はかうして成つたのである。時に居易は四十四歳であつた。

だがその體制は元稹のそれとは甚しく異なる。元稹はその八百餘首を、「色類相ひ從ねて共て十體と成し」てゐた。その十體とは、古諷・樂諷・古體・新題樂府・律詩(五言、七言)・律諷・悼亡・艷詩(今體、古體)である。これに對して居易は、約八百首を言語形式より古體と近體との二つに大別し、次いで前者を表現形式によつて三類に分つてゐる。

① 遇ふ所、感ずる所にして美刺興比に關する者、又た武徳より元和に訖るまで、事に因つて題を立てて題して新樂府と爲す者、共て一百五十首。之を諷諭詩と謂ふ。又た或は公より退きて獨り處り、或は病もて移りて閑に居り、足るを知り和を保ち、情性を吟翫する者、一百首。

之を閑適詩と謂ふ。又た事物の外より牽き情理の内に動き、感遇の隨に歎詠に形るる者、一百首有り。之を感傷詩と謂ふ。(①遇、「那」は適に作るに從ふ。②閑、「舊」は臥。③情性、「舊」は性。性情。④物、「英」は務。⑤理、「英」は性。)

「諷諭」・「閑適」・「感傷」がそれである。この分類は、股數や名目が異なるのみではなく、元稹には見られない整然たる秩序がある。それは文學に對する立場が確立し明確な編纂意識があつた爲である。

元稹はその書簡で、先づ當時に於ける政治の亂脈や社會の混迷を指摘し、「公私の感憤、道義の激揚、朋友の切磨、古今の成敗、」等を主題として制作せざるを得なかつたと述懐してゐる。これが表現形式としての「諷」といふ一類であり、言語形式からして、古・樂・律の三に分たれ

たのである。だが元稹の制作はこれのみではなく、「凡そ對遇する所にして常に異なる者は、則ち詩に賦はんと欲り。」とも記すやうに、他にも少なからず關心してゐたのである。従つて「諷」といふ一體を設定しはしたが、それはなほ他と並立すべきものであつた。こゝに居易との相違がある。居易はさうした制作が、唯一のものであり、それなくしては文學の存在意義が喪失されると強調するのである。もと六經は人間の生活の理念を指示する。その一である「詩」は、その故に人間の文學行爲の規範となる。しかも「詩」は、「風、雅、頌、比、賦、興」の六義に立ち、「時政を補け、察り、人情を洩はし、導く」ものであつた。従つて「文章は時の爲にして著はす合く、歌詩は事の爲にして作る合く」、更に展べていへば、詩は「人の病を救ひ濟け、時の闕を補け補ふ」ことに直接に連ならねばならない。これに志向するあの諷諭の詩は、「詩」の傳統を繼ぎ、「詩道」に即するものとして絶對の價値をもつのである。居易はさう主張するのである。ただ、この政治的な或は社會的な調和ある生活への關心は、やがて自己の調和ある生活にも向ふ。その状態への希求や詠歎が、「足るを知り、和を保つ」ことを主題とする閑適の詩である。閑適の詩は諷諭の詩と本質的に相容れないものではない。その故に、「詩道」よりは隔るといつても、無意味なものではなかつた。しかし、事物によつて内に強い感動が湧き、その感動のまゝに歌ひ出される感傷の詩は、さほど價値のあるものではない。まして、感興を美的形式に盛つた律詩などは取るに足るものではなかつた。居易に於いては、あの「秦中吟」や「新樂府」などの諷諭に屬する作品が最も價値高く、「陶潛體に效ふ」等の閑適に類せられる詩が続くべきものと觀ぜられてゐた。

しかし當時は、「詩」の傳統は斷絶してゐた。それは遠く秦漢に源がある。その頃既に六義は缺除し始め、晉宋には漸く微弱となり、やがて梁陳に至つて盡く亡失した。詩はただ風雪花草を對象とし、文字の奇麗を競ふものとなり終つたのである。唐に入つてこの頹落から立直るべき努力が始められたものの、未だ不完全にしか實現されてはゐなかつた。居易はこの「詩道の崩壊を痛み、忽々として憤發し、或は食に哺を輟め、夜に寢を輟め、才力を量らずして、之を扶起せんと欲し」たのである。だがさうした努力は、一般から激しく否定された。

凡そ僕が雨を賀ぐ詩を聞けば、衆口籍々として已に宜に非ずと謂へり。僕が孔叢を哭む詩を聞けば、衆面脈々として盡に悦ばざりき。秦中吟を聞きては、則ち權豪貴近の者、目相ひて色を變ぜり。樂遊園に登りて足下に寄する詩を聞きては、則ち政柄を執る者扼腕せり。紫閣村に宿する詩を聞けば、則ち軍要を握る者切齒せり。

①口、「英」は言。②「脈」は發字。
③「宜」も、「英」は言。④「齒」は發字。
⑤「已」は發字。

と元稹に書き送つてゐるが、居易の主張する文學は世に容れられなかつたのである。容れられないだけでなく、惡意をもつて攻撃されたので

ある。そして遂に中央から追放され、江州の一司馬に貶謫されるに至つたのである。かうした世俗の排撃はまだしも堪へられる。文學に對する信念が搖がぬまでは。だがさうした信念さへも搖がさうとするものがあつた。

其の我を非とせざる者は、世を擧^①べて三兩人に過ぎず。鄧魴といふ者有りき。僕が詩を見て喜べり。何ばくも無くして魴死せり。唐衢といふ者有りき。僕が詩を見て泣けり。未だ幾ばくにもならざるに衢死せり。其の餘は足下のみ。足下又た十年來、困み躓くこと此くの若し。

嗚呼、豈に六義四始の風、天將た破壊して支持す可からずとするか。抑又た知らず、天の意、下人の病苦をして上に聞かさらしめんとするか。然らずんば、何ぞ詩に志有る者の利あらざること此くの如くに甚しきや。
(①世の字、「馬」はなく、
②足下の二字なし。)

僅かの理解者も次々に死し、今は元稹一人のみである。しかもその元稹も困窮の境涯に陥つてゐる。自己の文學を支持する者は、悉く悲惨な運命を辿つてゐるのである。詩道の文學がかくも虐待されるのは何故であらうか。「天」が既にそれを否定する爲ではなからうか。居易はいま、「天」さへも疑はなくてはならなくなつたのである。「天」を信じ得ないで何が信じ得られるであらうか。居易の苦悶は深かつた。だがその果てにそれを突抜ける手掛りを探り得た。韋應物の場合である。貞元の初年蘇州刺史であつた時、十四五歳にして蘇州に至り、心ひそかに高い調べのその詩に熱い心を捧げてから、なほ變ることなく傾倒し、當代には及ぶ者がないとまで信じてゐる。しかし人々は、未だその價値に眼を開き得ないでゐる。「人の大の情」が「耳きを貴び目きを賤しみ、古を榮ありとし今を陋すむ」ものだからである。その故に、たとへ現在に一般から愛重されぬとしても、價値はいささかも減ずるものではなく、やがては時を経て認められるに至るであらう。それと同じく自己の文學の現在に於ける不遇も、實は「天」と係りはない。眞實の評價は必ず將來に興へられるであらう。居易は漸くにしてこの心境に達し得た。そして元稹にかう書いた。

千、百年の後、安んぞ知らん、復た足下の如き者の出でて、我が詩を知愛することの無からんことを。

元稹がさうであるやうに、いつかは自己の文學の理解者も出るであらう。それは遠い將來であるとしても。居易は今、搖がぬその文學への信仰から、評價を後代に期待したのである。十五卷の詩集はかうして編集された。そこには後世への傳達が意圖されてゐた。従つて強い編纂意識があり、その故に體制も整備されたのである。

第二次の自撰集の編纂は、元稹のそれに影響されたものであるとしても、既に彼自身に於いて十分な根據があつた。いはば内部に熟してゐた

ものが、外からの刺戟によつてその殻を破つて生れ出たものであつた。

三

「拙詩を編集して二十五卷を成し、因りて卷末に題して戯れに元九、李二十に贈る」(卷二)詩の中で、世間の富貴には分無かる應きも、身後の文章には名有る合し。

と詠つてゐた。陳寅恪氏はこの詩を長慶末年の制作と定めてゐるが(元白詩箋證稿)、全くの誤解に過ぎない。十五卷の詩集が成つた直後の詠懐であることに紛れはない。この身後の名といふ觀念は、遠く漢の楊雄(AB・DC・153)の、自己の文學の時間を越えた價値の主張に始まるが、さうした楊雄にも似た意識が、いま居易には湧き上つて來たのである。左遷といふ政治的な失脚は、現實的な富貴に對する期待を破碎してしまつたが、深い文學の信仰を導いたのである。信仰は決意を呼ぶ。元稹も「道の屈まれて才は方めて振び、身の閒にして業に始めて専ら」(卷一七江樓夜吟元)なるを得たと悟つた。富貴への期待を棄却することによつて文學の眞實へ生きようとしたのである。もとよりその内容は昔日のものではない。主張でもなければ假托でもなく、それ自體が目的でもあるやうなものである。「琵琶行」(卷二)もこの境涯から生れ出たのである。だが時としては仄かな疑惑も湧く。僻陬の地で求め得た廬山の僧徒との交渉に、佛教は制作への没頭が一つの煩惱であり、善事への障碍であることを教へたからである。制作衝動は時に「詩魔」として意識せられた。しかしながら制作への熱情は、そのやうな觀想で滅却し去るものではなかつた。

空門の法を苦に學びて自從、銷し盡す平生の種種の心を。

唯詩魔有り未だ降すこと得はず、風月に逢ふ毎に一たび閑に吟ふ。(卷一七) (開時)

詩は次々と記録されて行つた。文もないではない。廬山の生活に「草堂の記」(卷三)を中心とする一群が産出されてゐた。

元和十三年(818)、忠州の刺史に除せられた。そこは、「地遠くして江界も窮まり、天低くして海隅の極なる」(卷一六東南行一百)所に在り、「巴人は猿狖に類し」(卷十一百江州至忠州)、「桐花は十月に開く」(卷十一桐花)僻地であり、故友から離れて心娛しむべきものとは何もなかつた。ただ詩と酒のみが慰めのよすがであつた。「謾りに詩を寫して卷を盈たし、空だに酒を盛りて壺に滿たす。」(卷一八東南行一百頓)と詠つてもゐるが、詩は卷敷を重ねて行つたのである。

元和十五年、穆宗の即位したその冬、居易は長安に召され、司門員外郎を拜し、ついで主客郎中知制誥に除せられ、翌長慶元年、中書舍人知

制誥に轉じた。五年にわたる流謫と孤獨との生活から脱して、相ひ適しい地位を得、知友と會同することができた時、制作は更に活潑となる。時に知制誥の職に在つた元稹は、制誥に工夫を凝らし一體を創造してゐた。居易は「近代相ひ沿ひて巧俗に失ること多きに、公の筆を下しし自り、俗一變して雅に至り、三變して典謨に至る。」(卷六一河南元(公墓誌略序))とも評してゐた。その元稹の新體に居易も參加してゐたのである。

樂天、翰林中書に於いて書詔批答詞等を取り、撰して程式を爲る。禁中號して白樸と曰ふ。毎に新入の學士有れば、求訪して寶重すること、六典よりも過ぐ。(元・卷三酬樂天餘思(不盡加爲六韻之作))

と元稹は記してゐるが、この「白樸」を「程式」として、新體には追從する者が多かつた。居易は自信をもつて制誥の起草を續けてゐた。更に元稹はもとより、元宗簡等との、その始め結ばれてゐた詩交も回復し、詩の贈答酬和はかなり頻繁であつた。

長慶二年、外任を求めて杭州刺史に除せられた居易は、その風光に觸發されて、とめどない感興のままに詩才を發揮した。翌三年十月、同州刺史より越州のそれに轉じて來た元稹を鄰郡に迎へ、「微之との唱和には、來去するに竹筒を以つて詩を貯む。」(卷五(三))といふやうに、「詩筒」(卷五封詩筒)で贈答を續けたのである。その酬和は、かつて元稹が令狐楚(765—836)に、

居易雅り能く詩を爲れり。就中文字を驅駕り、聲韻を窮極すを愛む。或は千言を爲り、或は五百言律詩を爲り、以つて投寄せ相る。小生自ら審ふに以つて之に過ぐる能はずと。往往に舊韻を排べて別に新詞を創り、名づけて次韻と爲し相ひ酬ゆ。蓋し難を以つて相ひ挑まんと欲るのみ。(元・集外文章上(令狐相公詩啓))

と述べてゐる「次韻」でなされることが屢々であつた。「詩筒」といひ「次韻」といひ、いはば詩に遊ぶ態度から求められたものである。まこと居易は詩を楽しんでゐた。

新篇は日日に成れども、聲名を愛む是ならず。舊句は時時に改むれども、性情を悦ましむるに妨げ無し。(卷五三(詩解三))

と綴つてゐるが、制作それ自體に意義を、改作そのものに悅樂を見出す時、文學は完全に目的となり、それに從事することが生活となる。純粹行爲としての文學に居易はいま達したのである。この時、同年及弟の崔元亮も湖州刺史として鄰郡に來た。三者一環の贈答酬和が始められた。

「湖州の崔十六使君の書を得たるに、杭越と郡を鄰ぬることを喜ぶ。因りて長句を成りて賀に代へ、兼ねて微之に寄す。」(卷五(三))といふ詩は崔元亮の書信に對する居易の酬答であるとともに、居易の元稹に向ける寄贈でもあつた。いまは見る由もないが、恐らくは元稹も居易に酬答し、崔元

亮へも寄贈したであらう。

この頃、元稹は再び自己の文集を編纂した。その直後、居易に詩を寄せて、

郡務に稍か簡あり。因りて舊詩を整比し、并せて封章を連綴焚削し、篋笥に繁委す。僅んど百軸を逾ゆ。偶々自歎を成しぬ。(元・卷二二、白・酬微之の注には①)

比を案に作り、②封章の下に詠草の二字を増し、③焚を削に作り、④篋を箱に作る。

と書き記してゐる。元稹は二十卷の詩集を編成してからも、折にふれて詩稿を整理し巻軸に収めてゐた。令狐楚に寄せたあの書簡にも、「古體詩一百首、兩韻より百韻に至る律詩一百首、合せて五卷に爲る。」とも述べてゐた。文稿にもさうした巻軸はあつた。「奏に叙す。」(元・卷三三)といふ一文に、「教本書より始まり人の爲の雜奏に至るまで、二十有七軸、凡て二百七十有七奏。」と記してゐるのがこれである。いまこれらを綜合し、削るべきは削つて、詩文の合集を編纂したのである。

この時、居易にもまた作品は堆積してゐた。元和十年、十五卷の詩集を編集してから後、江州・忠州・長安、そして現在の杭州と四方を巡つてゐる間に、ほど八年を越える月日が流れてゐた。時に身を病むことはあつても、詩的感興はいさゝかも衰へることなく、今に至るまで制作は續いてゐた。また廬山の僧徒との交渉に、或は知制誥の職事に、何時しか文卷もその量を加へてゐた。整理されなくてはならぬ時期に達してゐたのである。しかもかうした作品は既に一般に高く評價されてゐた。かつてきびしく批難され、その故に人に知られることの少なかつた、賀雨、秦中吟等諷諭の一群も、二十年を経たこのごろでは、

禁省、觀寺、郵候、牆壁の上に書せざるは無く、王公、妾婦、牛童、馬走の口にも道はざるは無し。繕寫し模勒して市井にて銜げ賣るに至る。或は之を持へ、以つて酒や茗に交ふる者あり、處處に皆な是り。(元・白氏・長慶集序)

と記録されるほどに廣く深く賞愛されてゐた。元稹との間の贈答詩にも數多くの追隨者があつた。

巴蜀、江楚の間、洎び長安中の少年は、遞ひに倣効ひ相ひて、競ひて新詞を作り、自ら元和詩と謂ひ爲せり。(同上、效、(英)はなし。)

詩はまさに一世を風靡してゐたのである。文もまたそれに劣らなかつた。高郢が知貢擧となつて舉試の風氣を革めた後に、三試を盡く一たびで通過した居易の文は常に人々の間で尊重され、

性習相ひ近く遠し、玄珠を求む、白蛇を斬る等の賦、及び百道の判は、新進士競ひて京師に傳へ相へり。(上同)

といはれ、新體制誥の模範文集である「白樸」は、「毎に新入の學士有れば、求訪して寶重すること、六典よりも過ぎたり。」と傳へられる。詩文ともに喧傳されてゐたのである。それは居易にも意識されてゐた。元稹に對する詩にもかうした文字が見える。

筆を走らせて往來しては卷軸に盈ち、官に除せられては遞互に絲綸を掌れり。

制は長慶從り辭高古にして、詩は元和に到りて體變新しぬ。(卷五三餘思未盡加爲六韻重寄微之)

かつてともに校書郎であつた時相ひ識り、制舉に應ずる爲に華陽觀に籠つた頃から深まつた友交に、詩の贈答は頻繁となり、寄和の卷軸は重疊し、比類するものゝない程になつてゐた。この文學的交渉の中に、新體を彼等は創造した。百韻や五十韻の長篇を居易が作れば元稹もこれに應じ、元稹が次韻の作品を作れば居易もこれに倣つた。形式だけに限つても確かに前代のそれとは變化してゐた。詩は元和時代(806—820)に新風を開いたのである。制誥もまた彼等の努力をまつて古體に返つた。居易が中書舍人を授けられた時、元稹は知制誥としてそれまでの俗氣を拂ひ古雅な一體を始め、居易の爲の制詞をも草した。やがて元稹が翰林學士承旨に轉ずると、居易は知制誥として元稹の風體を承け、その制詞も綴つた。長慶時代(821—824)に制誥は氣品高きものとなつたのである。元和の詩風や長慶の制體が、彼等によつて確立したことを、この四句は誇らかに詠つてゐる。もとより叙述の面では多分に元稹に捧げられた讚辭となつてゐるが、その底に居易の自負の流れてゐることを見逃すことはできない。居易は自己の文學に對して高い評價を與へてゐるのである。

やがて任期が満ちて、四年五月、居易は杭州を去つた。その時、自己の作品を一括して元稹の許に留めたのである。元稹はそれを編輯して文集を完成し、序を作つてその卷首に附した。時は十二月十日である。

長慶四年、樂天杭州刺史より右庶子を以つて詔還さる。予れ時に會稽に刺たり。因りて盡く其の文を徵るを得、手自ら排續して五十卷を成す。凡て二千一百九十一首。前輩多く前集中集を以つて名と爲すも、予れ以爲く、陛下明年改元す當く、長慶是にて訖ると。因りて號して白氏長慶集と曰ふ。(①(英)は刺部、(文)は刺部。②二千一百九十一首、(舊)は二千二百五十一首。③(英)は(英)は皇帝、(文)は國家。④(那)は明年秋に作り、(元)亦同じきも、(舊)(英)に従ひて秋の字を削る。)

文集の名は元稹によつて「白氏長慶集」と命ぜられた。それは、穆宗に代つて敬宗が即位し改元せられて、長慶といふ年號が今年を以つて廢されるといふ感慨からであつた。たゞし、編定が長慶の最後に當つてゐたといふ偶然に支配されたのではない。もともと文集の名は前集とか中集とか稱せられることが多いと元稹は述べてゐた。獨狐及(744—796)の、友人李華の文集の爲の「趙郡の李公の中集の序」(文苑英華卷七〇二)には、「監察御

史已前の十卷を斷ち、號して前集と爲す。」といふ文字が見え、更に「他日此れに繼ぎて作れる者は、まさに後集と爲す當べし。」とも記されてゐる。かうした事例を元稹は意識しつゝも、それに倣はずしてこの名を選んだのは、長慶といふ時代に對して特別な心情が動いてゐた爲である。「長慶曆」(元・卷八)とか「長慶四年の曆の尾に題す」(元・卷三三)とかの詩は、再び用ひられることのない長慶の曆への愛惜が詠ぜられてゐるが、それは曆に託する時代への愛惜でもあつた。まこと長慶は元稹にとつて最も光輝に満ちた一時期であつた。穆宗によつて長い追放から解除せられ、忽ちに特別任用されて宰相の位についた。更に「連昌宮詞」(元・卷三四)を中心とする一群の作品が認められ、制誥に新體を創造し、文學活動も頂點に達してゐた。その故にこそ自己の文集に「長慶集」と命名したのである。しかも、この段階に至つた自己の文學は、實は居易のそれに負ふべきものが多く、居易の文學もまた自己の影響によると意識されてゐた。この文學的一體觀が、元稹をして居易の文集に自己のそれと同じ名稱を冠せしめたのである。この命名の態度は、「手自ら排續し」たといふ言葉とともに、居易の文集編纂にかなり積極的に動いてゐたことを思はせる。

元稹は序で、先の文章に續けて、諷諭の詩、閑適の詩、感傷の詩、律詩、賦贊・箴戒の類、碑記・敘事・制詔、啓奏・表狀、書檄・詞策・判と分類して、それぞれの個人的特徴を評定してゐる。この分類と次序とが、編成された白氏長慶集に即してゐるとすれば、そのまま白氏長慶集の體制ともなる。詩を古體と近體とに大別し、古體を諷諭・閑適・感傷に細別することは、居易自撰の十五卷の詩集に既に採られてゐた。しかもそれは元稹の詩集とは異つた分類の仕方である。分類のみならずその呼稱にも元稹に見られぬものがある。元稹の「古體」と呼ぶものを居易は「古調」と名づけてゐた。この呼稱はそれまでさほど行はれたものでもないが、居易がこれを用ひたことは、かつて忠州赴任の途上ものした「三遊洞の序」(元・卷二)の、「各々古調詩二十韻を賦ひて石壁に書せん。」といふ記述によつても疑ひない。元稹のこの編纂は、詩に於いては居易の十五卷の體制をそのまま襲用したのである。その編次は、十五卷以後に制作された作品が卷十六から載せられたのではなく、十五卷の中に繰入れられたのであつた。「曲江にて秋に感ず。二首。」(元・卷二)の序に、

元和二年、三年、四年、予れ歳毎に曲江にて秋に感ずるの詩有り。凡て三篇、編して第七集卷に在り。

といふ語が見える。この三首は、各種今本みな卷七ではなく卷九に列してゐる。これについて汪立名は、「今本の第七卷は盡く江州の詩なり。而れば所謂第七集卷者、皆な考ふ可きなし。」(白香山詩集凡例)と述べ、岑仲勉氏もこの説を認めてゐる。しかしそれは不可解なことではない。十五卷本に於いては、諷諭・閑適の詩が六卷を占め、卷七から感傷の詩が始まり、この三首もそこに收められてゐたのである。しかし十五卷本の後に諷諭・

閑適の詩が制作され、それぞれの部に加へられた爲、卷七はすれて卷九となつたのである。十五本卷以後の作品は古體と近體とに大別され、古體が更に三類に分たれ、十五卷本の各類に配列されたのである。長慶集編成の際、この分類が居易によつてなされてゐなかつたとすれば、元稹が行つたこととなる。「曲江にて秋に感ず。二首。」の序は長慶二年七月十日の制作に紛れはないから、少くとも長慶二年までは、分類され附加されてゐない。恐らくは元稹がそれに當つたのであらう。元稹の手はかうした所に加へられたのである。文の方ではどうであらうか。居易は時に應じて整理し卷軸に收めてゐた。「策林」はその代表的なものである。「百道の判」も卷軸に定着してゐた。「翰林制詔」や「中書制詔」は當然一括して整理さるべきものであつた。しかもそれらの次序は特異なものではない。元稹の意圖が積極的に發動した跡は見出し難い。白氏長慶集を自己の責任に於いて編定した後、その卷後に、

樂天の爲に詩集を自ら勘す。(元・卷)
(三二)

といふ文字を書きつけてゐるが、そこでは「詩集」といつて文卷のことには全く觸れてゐない。恐らくは文は居易の編次をそのまま繼いだものであらう。元稹の白氏長慶集編纂への参加は、居易の體系に従ひつゝ、特に詩の部に於いて作品を分類配列したことであつた。

居易が元稹に文集の命名を許し、その序を求めたのは、元稹が深い理解者であり、文學の變らぬ同志であり、作品の價值を知つてゐると認めただからである。長慶三年、元宗簡が死に臨んで、「白樂天は我を知る者なり。我歿するも、其の遺文に樂天の爲りし序を得ば、恨み無けん。」(卷五九故京兆元少尹文集序)と告げたのも、居易が元宗簡の文學について、「遺文の三十軸、軸軸みな金玉の聲あり。龍門の原上の土、骨は埋むるも名は埋めざらん。」といふ程に、常から高い評價を與へてゐたからである。序を作る者もさうした作品價值の認識なくしては不可能であつた。梁肅(753-793)が李泌の文集に序を記したのは、「斯言は以つて後世に傳へざる可からず。」(文苑英華卷七〇三)といふ信念があつた爲である。元稹はまこと居易の文學を信じてゐた。かつて居易に知制誥を授ける制詞を草し、「其の詞賦を視て甚だ喜ぶ。相如と處を並くし時を一緒するごとし。」(元・卷)といふ述べ、居易を司馬相如(118)にも擬へてゐた。長慶集の序で、「篇章ありて自ら已來、未だ是くの如く流傳の廣き者は有らず。」といふやうに感謝することもあつた。文學價值の強い意識の上に文集の編定とその序の制作を元稹は引受けたのである。

白氏長慶集の編定は、居易の、自己の文學への信念と、元稹の、それへの信賴から成つたのである。

二 後集の續成

一

太子左庶子として洛陽に至つた居易は、それまでの長い希望が満たされたまゝに、「老の將に至らんとするを知らず、猶ほ自ら詩狂を放まゝにす」る(卷八洛中偶作、「那」は獨に作るも「馬」注の猶に作るに従ふ)生活を續けてゐたが、翌寶曆元年(825)、蘇州刺史に除せられた。蘇州は杭州と同じく、むしろそれ以上でもある風景の地である。詩思は詩筆を執らせずにはゐない。「袖中には吳郡の新詩本。」(卷五四「故衫」)と詠ひ、或は「新詩を寫して微之に寄せ、偶々卷後に題く。」(卷五)と記すやうに新しい詩卷も既に成つた。時に元稹は越州に在り、崔元亮も湖州に在つた。かつての三州の贈答は復活した。「郡中にて閑獨なるまゝに微之及び崔湖州に寄す」(卷五)に對して元稹も崔元亮も酬答したであらう。だが間もなく眼を病み肺を痛めて居易は百日の休暇を請はなくてはならなくなり、遂に職を辭して再び洛陽に歸つた。太和元年(827)、長安に召されて祕書監を授けられた。「三教論衡」(卷五)はこの十月の記録である。ついで翌二年に刑部侍郎に除せられた。このころ、元稹の「四十三首の近作」に次韻で和した一群が成つた。それに、曩者唱酬し、近來困り繼ぐこと、已に十六卷にして、凡て千餘首なり。其の敵爲るや、當今には見ず、其の多爲るや、古從り聞かず。所謂天下の英雄は唯使君と操とのみ。(卷五三和微之「詩二十三首序」)

と居易は書き送つてゐた。早い時代から元稹と贈答を開いて今に至るまで、その作品はいつしか千餘首にも上り、本集とは別に「唱酬」と「因繼」といふ二部から成る贈答集が、はや十六卷を重ねてゐたのである。その文學的交渉の深さは當代に於いて比類がなく、その作品の堆積量は未曾有であつた。それはまさに詩壇の偉觀である。居易はいまそれを意識したのである。さうした意識は自己の文集へも連なる。しかも體力は蘇州時代以來、深い傾斜をもつて急激に衰へて行くのを自覺した。齡も五十七であつた。かくて長慶集から後の作品の整理を始めたのである。

前三年、微之予が爲に文集を編次して之に叙す。凡て五帙、帙毎に十卷。長慶二年冬に訖。白氏長慶集と號す。邇來復た格詩、律詩、碑誌、序記、表讚有り、類を以つて相ひ附し、合して卷軸と爲す。又た五十一從り以降卷にして第(卷五一後序、「那」は記に作るも「馬」注に従ひて訖に改む)づ。

といふ序を作つたのは、この年の秋、それまでの作品の整理を終へた時であつた。その文集は長慶集五十卷に續いて、卷五十一から始められたのである。文は長慶集とほゞ同じ分類と次序とが採られたが、たゞ詩に於いては、言語形式として格詩と律詩とに大別され、長慶集の表現形式

としての分類は棄て去られてゐた。

格詩については居易自ら解説するものはない。しかし居易はこの語を一再ならず用ひてゐる。最も早いのはあの元宗簡の文集の序である。ここでは、「格詩二百八十五、律詩五百九、賦述銘記書碣讚序七十五を著はす。」と述べられてゐた。こゝと等しく律詩に對應する呼稱であるから、律詩に非ざる詩を指すものに相違ない。それについて汪立名は、「古體、歌行、樂府を統べて言ふ。」(白香山詩集後集自序注)と判断してゐた。岑仲勉氏はもとより無條件にこれを承認してゐる。陳寅恪氏は汪説を是認しつゝ、別の廣義をも考慮してゐる。しかし汪説そのものに疑義がある。各種の傳本の、卷首に格詩を記す時には、卷五十一に於いて「格詩、歌行、雜體」と見えるやうに、必ず歌行或は雜體の語を下に連ね、それが如何なる場合にも卷内の作品に適ふからである。とすれば格詩は歌行や雜體を除くものとなる。長慶集に於ける古調詩と相ひ似てゐる。だが、古調詩を棄て、こゝに格詩を題するのは何故であらうか。本邦古鈔本に格詩を標記する卷五十二には、「符員外の香山寺に遊び、數日歸らず。兼ねて尺書を辱うし、大に勝き事を誇る。時正に衙に坐ひて囚を慮ぶる際に値る。筆を走らせて長句を題し、以つて之に贈る。」といふその「長句」の詩がある。長句は如何なる場合にも五言を含まず、必ず七言の形式についてのみ居易は使用する。たしかに格詩は七言を容れるものであつた。三浦安貞が、「五七言ノ文字ノ整齊タルニ就キテイフニヤ。」(轍詩)と指摘した通りである。だが古調詩は全然七言を除外したものであつた。七言の作品を含めれば古調とは言ひ難い。そこに新しく呼稱が求められて格詩が得られたのである。もとよりこの呼稱は居易に始まるのではない。既に水野平次氏が指摘されてゐるやうに(白樸文學)、空海の文筆眼心抄にも記録されてゐるから、居易以前の術語である。この格詩がこゝで新しく採上げられたことは、七言でもつて古體が制作されたことを示すのであり、文學への態度が推移したことを語つてゐる。かつて「元九に與ふる書」に於いて諷諭の詩を極度に鼓吹したのは、元稹の「詩に敘して樂天に寄する書」に對して、自己の立場を闡明すべく、それまでの文學觀を一點に集中し尖鋭に主張した爲であり、間接には、力點を置くそれらの作品が一般から拒否され、更にはその故に江州へ配流された憤懣を投出しようとしたからである。だが憤懣が諦念に代ると、あのやうな文學的主張への反省も起り、一般から賞愛される文學への回顧が始まり、やがて文學を樂みとして觀することゝなり、律詩へ没入した。かくて近體の一形式である七言が採上げられることゝなつたのである。それは同時に古體が五言から離れることでもあつた。格詩の下で諷諭・閑適・感傷の表現形式による分類が消えたのも、既に分類される程の作品がなかつた爲である。こゝに長慶集とは異なる體制で編纂される必要があつた。居易は長慶集の秩序から脱して長慶集とは別の立場で以後の作品を整理し始

めたのである。

卷五十一から始まるこの文集は、長慶三年からの作品を収めてゐた。長慶集は四年十二月に元稹が編定したものであつても、「長慶二年冬に訖る」といふ文字がこゝに記されてゐるからである。たゞこの文字には疑ひも挿まれてゐる。岑仲勉氏は「二」を「四」の誤りと主張する。「前三年」といへば、長慶四年十二月に編定された長慶集が序とともに居易の許にとゞけられた翌年寶曆元年を指し、長慶二年とは甚しく合ひ難いこと。卷五十以前に長慶三年・四年の作品が多く含まれてゐること。長慶集の序に、「盡く其の文を徴るを得たり。」と元稹が記してゐること。これが岑氏の根據である。しかしいづれも成立し難い。居易が「前三年」といふのは、長慶集の編定と序文の成つた時を大まかに示してゐるのであり、長慶集の内容に觸れてゐるのではない。しかも「長慶二年冬に訖る」といふのは全く内容についての言葉である。長慶四年に編纂されたが、その内容は二年までの作品であるといふのに何の不都合があらう。又、今本に於いて長慶三・四年の作品は、卷五十以前と卷五十一以後のいづれにも收められてゐるのであり、たゞ卷五十以前にも見えるといふのでは全く根據にはならない。まして今本は岑氏も力説するやうに後人の改竄を経てゐるのである。その今本をば周到な分析なしで論據とすることは無暴である。更に、「悉く」といふ一語を重視すれば杭州在任中の作品をも遺すことなくも解されよう。しかし常に必ずさうであるとは限られない。あまりにも拘り過ぎた理解の仕方である。しかも重要なことには、「四年の冬」では通じないのである。居易が杭州に在つたのは、「去年十月の半、君は來りて浙東に過ぐ。今年五月盡き、我は關中に向ひて發つ。」(卷五三除官)といふ詩句が明示するやうに、五月末までであり、杭州の詩を含むとしても冬に至り得ない。又、卷五十以前に收められる三・四年の作品は、「冷泉亭の記」(卷二)がさうであるやうに殆んど卷末にのみ位置するのであり、卷五十一以後よりも遙かに疑ひ易いのである。更に、岑氏が解釋したやうに「長慶二年冬」を編定と序にかければ、冒頭の「前三年」に對して、短い文の中で無意味に同じ時期の指定を繰返すこともなる。「二」を「四」に改めることは絶対に不可能である。岑氏は汪立名の「二」を認めたことに對して、それを否定したのであらうが、岑氏の説こそ否定さるべきである。長慶二年冬までの作品を居易は一應整理し、それを元稹に送つたのであり、三年・四年は未整理のまま置かれてゐたのであらう。それをも、今、文集に編制したのである。卷五十一以降は、長慶三年から始まり、「太和二年秋」の現在に至るまで六ケ年に近い作品を對象としてゐたのである。序はなほ續くが、その中に「拙音狂句も亦た已に多し。」といふ、數量についての満足を盛る言葉の見えるのはさうした爲である。更に、「餘習盡きずして時々一詠するが若きは、亦た自ら知らざるなり。」(那)は集に作るも(汪)ともそ

こで述べてゐた。爾後に於ける制作への豫感既に動いてゐたのである。

二

翌三年に編集された二卷の「劉白唱和集」にはさうした作品も收められた。それを解説した文の中に、居易は、

一往一復、罷めんと欲すれども能はず。是に繇つて一篇を製る毎に、先づ草を相ひに視る。視竟れば則ち興作り、興作れば則ち文成る。一

二年より來、日々に筆硯を尋けて、同和贈答し、覺えずして滋く多し。(卷六〇劉白唱和集解)

と記してゐた。酬和は寄贈された作品に感興を觸發され、その感興によつて制作されたのである。もとより事物に激發された感動によるのでは

なく、既に成つた詩篇に惹起された情緒から詠ひ上げられたのである。従つてそこには表現への顧慮がより強く動く。

『雪裏の高山は頭の白きこと早く、海中の仙果は子の生ること遅し。』『沈舟の側畔をば千帆の過ぎ、病樹の前頭に萬木は春なり。』の句の類

は、眞に神妙と謂へり。

と言葉を續けてゐるが、居易はこの方向へ強く關心し出したのである。太和六年、先の二卷に繼いで「吳洛寄和の卷」と名づけられる第三卷が成つた時、

得儻の句、警策の篇、多く彼れ唱し此れ和する中に之を得たり。(卷五九與劉蘇州書、彼唱此和の四字、(英)は彼此唱和に作る)

と劉禹錫(772—842)に書き送つてゐるが、その言葉の裏には、贈答に於ける發想や措辭への努力が感じられる。しかしその努力は居易にとつて楽しいものであつた。贈答のみではなくすべての制作がかうして續けられて行つた。

太和七年、崔元亮が長逝した。同年の及第者として早くより深交を結び、近くしては蘇州で元稹とともに三州の唱和をなしてゐたその人の死は、居易に深い悲みをもたらした。俄に寂寞を感じて周圍を見渡すと、翰林以來相ひ許してゐた崔羣(772—832)も六年に歿してゐた。そのみではない。知己として共に誇つてゐたあの元稹も五年には卒してゐた。二十年來の交友はたゞ居易のみを残して去つたのである。「併せて失ふ鸞の侶、空しく留む麋鹿の身。只だまさに嵩洛の下にて、長く獨遊の人と作る應し。」(卷六四微之教詩晦叔相次長逝駭然目(備因成三絶、鸞、(英)は鸞海))と詠はずにはゐられぬ孤獨感が身に迫つて來る。顧みると齡は既に六十二である。「殘年我に幾何ぞ」といふ歎きも出る。さうした心境の中に、太和八年、それまでの作品を整理した。編集が成つて「洛詩に敘す」(卷六)といふ一篇を綴つた。

太和二年、詔して刑部侍郎を授けられ、明年病もて免ぜられて洛に歸る。旋して太子賓客を授けられ、東都に分司す。居ること二年。就きて河南の尹の事を領す。又た三年、病もて免ぜられ、履道里の第に歸る。再び賓客分司を授けらる。三年の春自り八年の夏に至るまで、洛に在ること凡そ五周歲。詩を作ることを四百三十二首。(事、(在)はなし。)

太和三年の春、洛陽に居を定めてから、今八年の夏までの作品を結集したのである。長慶集に收めるものと、太和二年に整理して編纂した文集に載せるものを通じて計れば、たゞならぬ作品量である。

才は古人に逮ばずと雖も、然も作る所は晉に數千首ならず。(所、「那」は古人の下に置くが、「英」)

とも述べてゐるが、そこには、かつての「拙音狂句も亦た己に多し。」といふ満足に代つて、自負さへも閃めいてゐる。だが才の劣れる者にしてなほそのやうな多量が可能となつたのは何故であらうか。

予れ佞からざるも文を喜び詩を嗜み、幼自り老に及び、詩を著はすこと數千首。

と記す文字によれば、文學への熱い心と文學生活の長さが居易に於いて直接に意識されてゐたのである。自己の文學に對するこのやうな感慨は、當然に文集全體にも及ぶ。洛詩は太和二年の編集と組み合はされなくてはならない。

翌九年その事は成つた。そして一本が江州廬山の東林寺へ納められた。

昔、余れ江州の司馬爲りし時、常て廬山の長老と、東林寺經藏の中に、遠大師と諸の文士との唱和集卷を披閱たり。時に長老諸、余が文集も亦た經藏に置かんことを請へり。唯然として心に許し、他日之を致さんとす。茲に迨るまで二十年を餘たり。今に余れ前後文を著はす所、大小合せて二千九百六十四首。勅めて六十卷と成し、編次既に畢り、藏中に納む。且に二林と他生の縁を結び、曩歳の志を復さんと欲ふ。故に自ら其の鄙拙を忘る。仍りて本寺の長老及び主藏の僧に請ふ。遠公の文集の例に依ひ、外客に借さず寺門を出ださずんば幸甚なりと。太和九年の夏、太子賓客、晉陽縣開國男、太原の白居易樂天記す。(卷六一東林寺白氏文集記)

東林寺はかつて江州司馬の時代、居易の生活がそこを遊つて展開した所であつた。王者への直言と諷諭の詩との爲に排斥されて左遷されたと思つてゐた居易には深い憤懣があつたが、それを消散させたのは東西二林に於ける佛敎生活であつた。遺愛寺から程遠からぬ所に草堂を築き、司馬の任期が満ちた後はそこで老を終へようと定めたこともあつた。それから二十年を経た今、死期の遠くないことを知る居易は佛敎へ強い關心

を懐いてゐた。前年には、「彌勒上生の幀を畫くの讚」(卷六)を作り、「願くは我が來世に時をひとし一くして上生せんことを。」とも述べてゐた。來世への期待も心の底にはあつた。しかも東林寺の長老から文集を置くやう請はれたことがあつた。もとより佛教的な内容を持つ作品が豫定されてゐたのであらうが。そして自らも心ひそかにそれを許してゐた。今や文集が成つて奉納のことが實現したのである。その文集は六十卷、詩文二千九百六十四首を収めてゐた。長慶集に十卷七百七十三首が加へられたのである。名は「白氏文集」と命ぜられてゐた。

翌開成元年(836)この六十卷の文集にその後の作品を加へ、更に遺漏を補つて約三百首を増し、「三千二百五十五首」とし「六十五卷」(卷六一 聖善寺 白氏文)にして洛陽の聖善寺に奉納した。聖善寺には、居易がその門徒とせられ、そこで八關齋戒を授けられた深い關係があつた。奉納のことは東林寺の場合と相ひ似た心情からである。

越えて開成四年、「合して六十七卷、凡て三千四百八十七首。」といふ文集を新に編し、「蘇州南禪院の白氏文集の記」(卷六)とともにその千佛堂へ送つた。かつて刺史であつたといふゆかりによつて執筆を依頼されてゐた「千佛堂轉輪經藏の石記」(卷六)が成つた時であつた。

文集七帙有り。合せて六十七卷、凡て三千四百八十七首。其の間、五常に根源し、六義に枝派し、王教を恢め、佛道を弘むる者、多しといへば則ち多し。然れども興を寓する放言、情を緣ぶる綺語なる者も亦た往往に之有り。樂天は佛弟子なり。備に聖教を聞き、深く因果を信じ、來業を結ばんことを懼れ、前非を知るべきを悟る。故に其の集、家藏の外、別に三本を録し、一本をば東都聖善寺鉢塔院律庫中に實き、一本をば廬山東林寺經藏中に實き、一本をば蘇州南禪院千佛堂内に實く。(馬には①多②則の二字なし。)

寓興の放言は私懷を托しての放逸な篇章を、緣情の綺語は私情の趣くままの宛麗な文字を指すのであらうが、この放言を記し綺語を綴ることは佛法の五戒を犯し十惡を爲すことであり、因果の理よりすれば來世に於いて苦報を受ける業因を結ぶことでもある。顧みて王者の道を扶翼し、佛陀の教を宣布する數多くの制作はあるが、あの愚しい文辭を書かないでもなかつた。非を悟つた今は善根を積み功德を施さねばならぬ。その故に供養として文集を因縁深き寺堂へ奉納したのである。まこと文集は、「才は古人に逮ばずと雖も、然も作る所は常に數千首ならず。」といふ自負を荷ふものであり、その故に最も貴重するものである。「柏を破りて書櫃を作るに、櫃牢くして柏復堅し。」といふ文集の櫃を作り、「自ら開き自ら鑿し閉め、置きて書帷の前に在るたり。」(卷六 聖善寺 文集)といふやうに、外ならぬ書齋の帷の前に置き、開閉さへも他に任せぬのである。易居にとつては、財力や努力では得られぬ、そしてまた如何なる人も代つて作り得られぬ貴重なものである。その文集を奉納することは確かに

居易がなし得る最上の供養であつた。文集の編纂は供養の爲になされたのである。

三

その冬の十月、「風痺の疾に得り、體癢み目眩み、左足支かず。」(卷六八病中)といふ苦患に惱み、少康は得たが完全な治癒は絶望となつた。信仰はこれを契機としていよいよ深まつた。翌年三月には「西方の幘を書くの記」(卷七)を作り、「弟子居易、香を焚き稽首し、佛前に跪き、慈悲心を起し、弘誓の願を發す。願くは此の功德をば一切衆生に廻施せんことを。一切衆生の我が如く老ゆる者、我が如く病める者有らば、願くは皆な苦を離れ樂を得、惡を斷ち善を修せんことを。」とも述べてゐた。信仰は本格的となつた。九月には發願の香山寺經藏の増修改飾のことが完成した。香山寺はかつて破損の甚しいのを歎いて瓦屋の葺修をしたことがあり、風疾の後の「香山居士」といふ稱號の由る所でもあつた。この頃から居易の奉佛生活は専らこゝを中心として營まれて行つた。

その十一月、「洛中集」が完成した。

白氏洛中集者、樂天の洛に在りて著はし所書なり。太和三年の春、樂天始めて太子賓客を以つて東都に分司してより、茲に及るまで十有二年なり。其の間、格、律の詩を賦ること凡て八百首。合して十卷と爲す。

先に「洛詩」を編纂してから、約六ヶ年の作品三百六十八首を加へて、十卷に結集したのである。この「洛中集」を香山寺經藏へ奉納しようとして「香山寺白氏洛中集の記」(卷七)の筆を執つた。

我に本願有り。今生世俗の文字の業、狂言綺語の過を以つて、轉じて將來世世に佛乘を讚するの因、法輪を轉ずるの縁と爲さんと願ふなり。十方三世の諸佛まさに知る應し。噫、經堂未だ滅びず、記石未だ泯びざるの間、此の願力に乗ぜば、安んぞ知らん、我が他生復ひ是の寺に遊び、復た斯の文を觀、宿命の通を得、今日の事を省み、智大師の、靈山を前會に記し、羊叔子の、金環を後身に識る者の如くならざることを。於戲、垂老の年、此に筆を絶たん。我を知る者有らば、亦た隠すこと無けん。

これもまた供養の爲の言葉である。だがしかしここにはさうとのみ見過し難いものがある。もともと今生に於ける破戒的な業過を、轉じて來世に於ける成佛の因縁となすといふことは、正統的な理論の上では單純に認められることではない。破戒はそれだけで成佛から閉め出されてゐるからである。成佛の扉が開かれる爲には懺悔が必須の條件であつた。深い罪の意識を媒介として始めて可能となるのである。この罪業の自覺が

いまの居易にはある。かつての「五常に根源し、六義に枝派し、王教を恢め、佛道を弘むる者、多しといへば則ち多し。」といふ自負はその姿を消してゐた。「寓興の放言・縁情の綺語」も、辯解がまじき形容詞をかなぐり棄てて「狂言綺語」として言ひ切れたのである。しかもそれは悉く「業」「過」と率直に認められてゐた。そのみではなく、さうした世俗の文字や狂言綺語の筆をここに折り、以後再び手にしないと宣言してゐるのである。生れて五六ヶ月にして知り、時にそれによつて名聲を得、或はそこに生き甲斐を見出し、今に至るまで六十九年間、如何なる場合にも共に在つた文字のことから去り、文學に袂別しようと思願してゐる。ただならぬこの決意こそ業過の自覺によるものに外ならない。もとより一時の發心ではなかつた。「唯り詩魔有りて降すこと得はず。」と詠じたのは遠い江州の昔であつた。人生の第一義から離れたものに心を費さず詩魔のみは降り得ないといふこの告白の裏には、文學へのひとすじな愛著と佛道への強い關心との葛藤さへ感じられる。罪の意識は既に芽生えてゐたのである。それ以來、時に強く時に弱くなりつとも居易の中に息づいてゐた。それが洛陽に於ける奉佛生活の上に徐々に成長して來たのである。やがて「二林と他生の縁を結ば」うと念願を始め、「寓興の放言、縁情の綺語」といふ文字に現はれたのである。たゞ、まだそこには文學への自負が存してゐた。時に風疾を得たのである。それを機縁として信仰は深まつた。「業」「過」がここに自覺されたのである。そして「惡を斷ち善を修せん」と發願し、「筆を絶たう」と決意したのである。だが、「漸くにして酒魔を伏し醉を放まますを休むれども、猶ほ口業を残して未だ詩を抛ちえず。」(卷六八寄題廬山舊草)と歎かねばならないやうに、妄言綺語たる詩を抛棄することは容易ではなかつた。どこか一點で強く踏切り、大きく飛躍しなければならぬ。その頃香山寺の經藏堂が完成し、居易は道場主となり飲食を供養した。そこに詩集を編纂して留め置くことに飛躍の契機を見出したのである。洛中集の編纂は居易の佛者になり切らうとする意志に發したものである。

かうして洛中集が成ると、文集も當然に完結されなくてはならない。「後集を送りて廬山東林寺に往け、兼ねて雲阜上人に寄す。」(卷六)といふ詩がその編成を語つてゐる。

後集をば寄せ將ちて何處にか去かしむ、故の山は迢遞して匡廬に在り。

舊の僧は獨り雲阜の在る有るも、三二年來書を得ず。

別れし後に道情の幾許か添へし、老い來てて筋力は又た何如。

來生の縁會は遠きに非る應し、彼れも此れも年過て七十を餘れば。

結聯の下句よりすれば、この詩は七十歳を過してから制作されたものである。居易は七十一歳で太子少傅を辭し刑部尙書を授けられて致仕したのである。若しこの年に詩が作られたとすば、「後集」と稱せられる文集は既にその會昌二年(842)には完成されてゐたこととなる。後集については、「白氏前に長慶集五十卷を著はし、元微之序を爲る。後集二十卷あり、自ら序を爲る。今復た續後集五卷あり、自ら記を爲る。」(後記集)といふ記録がある。後集は五十卷の長慶集に續き、五卷の續後集に先んずるものである。この五卷は會昌五年に成る。五卷といへばかなりの量であるから、後集二十卷との間には相應の時間的距離がなくてはならない。とすれば會昌二年よりもその編成が後れることはあり得ない。しかも更に重要なことには、洛中集編定の事情から見て、それが完成された開成五年十一月に引續いて文集も編成さるべきものであるから、後集はその翌年、即ち會昌元年に成つたものと考へるべきであらう。岑仲勉氏もこの詩を指摘し、「居易は會昌二年にやうやく七十一になる。ここに年七十を過ぐといつてゐるから、後集の編定は多分是の年であらう。」と推定してゐる。その見解はほぼ承認し得るが、ただ詩が會昌二年の作であるとしても、後集の編定は詩の制作と時を同じくするとは限らないし、更にそれよりも遡る可能性が強いから、會昌元年と定めるのが最も事實に近いであらう。

後集はそれまで過渡的な形態で屢々編纂されてゐた。第一回は太和二年に、第二回は太和九年に、第三回は開成元年に、第四回は開成四年に。それがこの第五回の編纂によつて一應完結したのである。だがそれまでの形態が悉く解體されたのではない。一切を新たに編纂し直すほどの強い編纂意識は洛中集の成立から見れば存在すべくもないからである。しかも第二次に成つた六十卷本に於ける後集十卷は、洛詩の整理を契機としたものであり、そこにはまだ積極的な意圖があつた。又、内容としては、杭州・洛陽・蘇州・長安・洛陽等の作品があり、それらが「卷五十一従り以降」、「格詩、律詩、碑誌、序記、表贊」の、「類を以つて相ひ附す。」といふ秩序によつて組織されてゐた。最初の十卷は容易には解消さるべくもない堅密さで構成されてゐる。ただ第三次の、六十五卷本に於ける十五卷は、第二次編纂の翌年に成り、更には、第四次の、六十七卷本に於ける十七卷とともに、直接には奉納を目的としたものであり、内容から見ても同じ洛陽の作品であり、堆積量もさほどではないから、第五次の編纂に對してその個性を主張し得るほどのものではなかつた。従つて第三次と第四次の編纂形態は第五次に於いて吸収されるが、第一次と第二次のそれは、原形のまゝに統合されなくてはならなかつた。ここに後集二十卷は、前十卷と後十卷との二部に分れ、それぞれに先づ詩

を格律に分つて配し、その後文を一括して列する體制が採られるに至つたのである。その痕跡は本邦古鈔の金澤文庫本及び北宋本の體制を承ける那波本にも現はれてゐる。この二本をも今本として一括する岑氏は、「後集二十卷の編定は、白氏が前集の次第にしたがつて、韻文を先にし散文を後にしたものであらう。今は散文の三卷が中に錯つてゐるが、それは不倫である。」と述べ、最後の編纂の際に一切が改められ、二十卷を通じて先に詩を後に文を配列したのであると考へ、那波本等の形態を否定し、前後の二部に分れることを居易の原形ではないと判断してゐる。それは先づ傳本の吟味を最初から拒否した所に成つた假空の一説でしかなく、更には居易の編纂態度を全く理解し得なかつたことに由來する。

後集はその二十卷が編定された後でその名で呼ばれたものではない。第一次の編纂を終へた時、居易は「後序」でかう述べてゐた。「前集に附して微之に報ず。故に復た卷首に序す。」と。長慶集はここで既に「前集」と名ざされてゐた。居易の意識に於いては、卷五十一から始まる部分は「後集」であつた。「後序」といふ言葉も「後集の序」といふ意味である。後集の名は長慶集を前集と稱した時に、既に定つてゐたのである。従つて後集は、前集たる長慶集と並立するものであり、二者を含むものに於ける後集なのである。二者を含むものは、五十卷の前集と十卷の後集とから成る六十卷の東林寺本に於いて示されるやうに「白氏文集」である。「聖善寺白氏文集の記」には「題して白氏文集と爲す。」とも明記されてゐた。その故に長慶集五十卷と後集二十卷とを合せた七十卷の文集も「白氏文集」と命名されてゐたのに疑ひはない。何故にこのやうに改められたのであらうか。もと「長慶集」の名は元稹の長慶時代に對する厚い心から與へられたのであつた。しかし公的生活とともに文學的個性にも差異を持つ居易にとつては、長慶時代はさほど關心するものではなかつた。居易の文學の様式的確立は元和であつた。しかもこの元和こそ長慶よりも遙かに長い時間であつた。更にその才能が滯ることなく流れ出す杭州や蘇州の刺史時代は、長慶を経て寶曆に續く時代であり、太和もこの延長であつた。洛詩を編成した時には、「幼より老に及ぶ」文學的生涯が意識されるのみであつた。しかもその文學にはきびしい姿勢が解け、居易はそれを樂しみそれに遊ぶ態度に導かれてゐたのである。元稹や劉禹錫との唱和に傾いてゐたのもこの爲であつた。文學は既に變貌してゐたのである。太和九年の六十卷本編纂の際には長慶は既に軽い比重しか持ち得なかつた。やがて後十卷時代に入ると、前十卷時代への反省が起る。反省は佛教への傾倒に比例して深まつて行く。そして文集の編纂は、それによつてこそ成佛し得る本願を導くものとなる。氣負つた世俗の名稱はもはや必要はない。長慶の名は排除すべきものともなる。「白氏長慶集」から「長慶」が去られると「白氏集」となる。六

朝では佛者の俗姓はきびしく拒否されてゐたが、唐代ではあの玄素(707-786)が俗姓をとつて馬素として通じたやうに、佛門でも認容された風習である。「白氏」を稱することは居易の場合にも自然であつた。「白氏文集」の名はここに定つたのである。それは後集第一次の編纂の時、既に新しく文集を産出しようとした意圖が延びて來たものであつた。

長慶集と後集とは別個の編纂ではあつたが、白氏文集として綜合されてゐた。それは何を意味するであらうか。後集の前十卷時代には、長慶集の時代に於けるやうな自己の文學への價值主張はない。主張しなくても價值が認められてゐたからである。ただ洛詩に現はれるやうな作品量への自負は見逃せない。そのやうな自負は元稹との唱和に於いても見えたし、第一次の編纂の際にも閃めてゐた。この自負はそれとしては無意味なものであり、それとして主張されるのは、そこに既に作品價値の認識があつたからである。文學に對する高い評價があつたからこそ、さうした作品の堆積に對する自負も湧いたのである。作品量に對する自負は形を變へた文學價値の主張である。第一次の編纂にもそれは見え洛詩にも顯著であつた。前十卷の編纂はここに成つたのである。だがやがて佛教へ深く傾倒するにつれて、編集を宗教的利益の爲のものにしようとした。聖善寺や南禪院へ納めた場合がそれである。しかし文學の眞中に根を張つた精神は容易には宗教へ徹底し得なかつた。たださうした行爲によつて一應救はれてゐたのである。その不徹底さは病苦による宗教的心情の強まりを媒介として明確に自覺されて來た。眞實の宗教的信仰は文學の便宜的な屈從を拒否するからである。ここに文學への烈しい愛著を宗教の立場で抹殺しようとする意圖が起つた。そして遂に文學に袂別すべく決意し、その契機として洛中集を編成し香山寺へ收めたのである。そこで完全な文學の否定が實現したとすれば、文集は更めて編纂される必要はない。文集に後十卷が續けられたのは、實は否定しきりではなかつたからである。居易は宗教的悟脱に安住するにはあまりにも情緒の中に時間を見出す人間であり過ぎた。かくて宗教にも落着き得ずして、又文學へ心牽かれたのである。あの執着は遂に斷滅し去ることができなかつた。もとより、積極的な價值主張を伴ふやうなものではなく、文集を完結すれば充足するほどのものであつたが。だがどこまでも執着は價値の意識に支へられるものである。後十卷にも文學への價值意識は底深くに在つた。二十卷の後集は居易の文學への價值意識に於いて完成したのである。それは長慶集と異なることはない。後集は長慶集の續成なのである。

三大集の成立

後集二十卷に收められる作品の制作時期は、長慶三年より會昌元年まで十九年間であり、長慶集のそれが、貞元十九年より長慶二年までとすれば二十年間であるのと相ひ似てゐる。しかし、長慶集が五十卷であるのに對して、これが二十卷に過ぎないのは何故であらうか。それはひとへに文の作量の減少の爲である。長慶集の詩の量がほぼ二十卷であることが明瞭にこれを示してゐる。文學への關心が淡くなつたのではなくして、「詩人」として徹底して行つたのである。開成三年に作つた「醉吟先生の傳」(卷六)は、洛陽に於ける十餘年の時間が、「盃觴」と「諷詠」との中に過されて行つた記録であり、「詩に淫する」人間の告白でもあつた。元稹や劉禹錫との唱和集がその卷數を加へ、洛詩や洛中集の詩集が編纂されたのもその故であつた。「詩を以つて書に代へ慕巢尙書の寄せら見るに酬ゆ」(卷六)の詩は、書信にすべきものを詩に綴つたものであるが、そのやうな作品も少くない。それは詩の方が文よりも自由に表現し得た爲であらう。居易には詩的形式に於いて、ものを考へ見ることが自然となつて來たのである。今や完全に詩人となつたのである。「香山寺洛中集の記」で、「此ここに筆を絶たん。」と誓ひ、やがて後集二十卷を編成したものの、詩の制作は止まるべくもなかつた。詩を廢することは生きることを否定することとなるからである。居易は命のある限り詩を書き續けなければならぬ。かつての誓願は破られ、再び詩筆は執られた。

もとより作品量はかなりに減じたであらう。風疾よりこのかた、視力は退き一脚は用をなさず、年とともに老衰は度を加へて行つた。さうした時に劉禹錫の死に會つたのである。劉禹錫との交渉も、蘇州で初めて對面してからの會昌二年まで十八年間續いてゐた。太和三年に二卷の唱和集が成り、五年に元稹と死別してよりは、贈答の變らざるただ一人の對象となり、六年の「吳洛寄和の卷」の次に、八年の「汝洛集」(劉夢得集、外集卷九汝洛引)があり、この時には既に「劉白唱和集」は五卷に達してゐた。「詩敵」とも呼ぶこの人の死は、老病の身にとつては大きな打撃であつた。

今日君を哭せば吾が道孤し、寢門に涙は滿つ白き髭鬚。

知らず箭折れて弓何にか用ひん、兼た恐る唇亡くして齒も亦た枯けんことを。(卷六九哭劉、尙書夢得)

といふ歎詠の中には、最後の文學的知己を失つた者の激しい慟哭が響き、深い孤獨の感慨が聞えて來る。一弓何にか用ひん」といひ、「齒も亦た枯けん」といふ言葉には、詩作の衰退が豫感されてゐるやうにも見える。作品量の減少は自然でもあらう。しかしそれはどこまでも居易に於け

る比率であり、外部に對しては並ならぬものであつた。「花を探ね酒を嘗むには多く先に到る。」(卷七一初致仕後戲留守生)といふ生活が續き、それには「行くにも亦た詩篋を攜ふ。」(卷七一不興老爲期)といふ用意があつた。時に「我が狂翁の一曲の歌を聽け。」(卷七一隨)と自らを顧みて自嘲めく言葉を出しつゝも、「知らず詔して許さる懸車の後、醉舞と狂歌の例有りや無しや。」(卷七一戲問牛相公)と誇つてもゐた。制作は限られる所がなく、作品は重積して行つた。その間、「詩章をば人に與へて千首を傳ふ。」(卷七一狂吟)と述べ、「薄か文章の子弟に傳ふる有り。」(卷七一)と記すやうに、作品量に對する自負が湧き上ることも屢々あつた。この意識はやがて後集二十卷にそれ以後の作品をも巻軸として加へずにはゐない。それらの作品の中にはもとより文もあつた。文苑英華(卷八)や文粹(卷七)に收められてゐる「太湖石の記」は今本には載せられてゐないが、居易の作品に疑ひなく、その制作は「會昌三年五月癸丑」であるから、整理はこの時にさるべきものであつた。この作品群は、後集とほゞ同じ體制で配列され、先づ詩と文とに大別され、詩は格・律の二類に分れたであらう。格詩が歌行や雜體と並べられたことは言ふまでもない。現實にさうした作品が見えるからである。やがて整理が成り、五卷として先の七十卷に附された。ここに於て文集は遂に七十五卷に達したのである。大きな誇りをもつて居易は、その卷後に「白氏集の後記」を書きつけた。

白氏前に長慶集五十卷を著はし、元微之序を爲る。後集二十卷あり、自ら序を爲る。今又た續後集五卷あり、自ら記を爲る。前後七十五卷、詩筆大小凡て三千八百四十首。集に五本有り、一本は廬山東林寺經藏院に在き、一本は蘇州南禪寺經藏院に在き、一本は東都聖善寺鉢塔院律庫樓に在き、一本は姪の龜郎に付へ、一本は外孫の談閣童に付へ、各々家に藏めて後に傳へしむ。其の日本、新羅の諸國、及び兩京の人家に傳寫する者は、此の記の在ならず。又た元白唱和因繼集共て十七卷、劉白唱和集五卷、洛下遊賞宴集十卷有り。其の文は盡く大集の内に在り、錄出して時に別行す。若し集内に無くして、名を假りて流傳する者は、皆な謬り爲りしもののみ。會昌五年の夏五月一日、樂天重ねて記す。(①南禪、(那)は禪林に作るも(馬)に従ふ。②聖善寺鉢塔院、(那)は勝善寺鉢塔院に作るも、聖善寺白氏文集記により改む。③新(馬)は馬)。

「今又た續後集五卷あり、自ら記を爲る。」といふのは、五卷に對する「記」を作つたとの意味である。その文は見るを得ないが、「今」といへば現實を強く指定するから、この自記が作られたのは、五卷が七十卷に加へられた時であらう。貞元十六年に行卷のことに自撰集を始め、元和十年に十五卷の詩集を著はして、長慶四年にそれらを含む定本的な長慶集五十卷が、元稹の責任に於いて編成され、その人の「序」が與へられた。やがて第一次後集を太和二年に編纂して自ら「序」を作り、八年に洛詩を編定して叙し、ついで九年に第二次後集十卷を編集し、開成元年

に第三次十五卷を、四年に第四次十七卷を、更に五年に洛中集と形成し、遂に會昌元年に第五次後集として二十卷を完成した。卷七十に至つて終結したかのやうに見えたが、又、續後集五卷が加へられてその「記」が綴られたのである。白氏文集は長慶集・後集・續後集の三部によつて七十五卷に達したのである。二十九歳、自撰集を始めてから、七十四歳のこの七十五卷に至るまで、四十七年を経てゐた。五十年に近い時間が流れてゐたのである。思へば長い道程であつた。餘命いくばくもない今、これから先たとへ多少の作品が續けられるとしても、文集はこれで完結されていい。居易は深く満足してゐた。かくて五卷の自記に續いて、七十五卷の文集の爲に重ねて筆を執つたのである。白氏文集の完成を告げるこの「後記」の日附は、會昌五年五月一日(845)であり、やがて長逝する一年ばかり前であつた。

二

幾度かの増補を経て成つた決定版とも見らるべきこの七十五卷は、詩文を合せて三千八百四十首を収めてゐた。しかし、もともと居易の作品が遺すところなく收められたものではない。「元九に與ふる書」によれば、元和十年の春、元稹と城南に遊び、その歸途馬上で「送ひに吟じ遞がはる唱し」た詩は遂に録せられることなくして了つてゐた。更に「劉白唱和集の解」にも、収録した首數を掲げた後、「其の餘の、興の乘に醉に扶はれて、卒然として口號する者は、此の數の在ならず。」と述べてゐた。即興の作品は紙墨に留められないものが多かつたのである。たとへ一度はそれに留められたとしても、文集に收められない作品もあつた。新唐書の本傳(卷一九)には、江州左遷に關して、「俄に言ふもの有り。居易の母、井に墮ちて死す。而るに居易、新井の篇を賦す。言は浮華にして實行無し。用ふ可からずと。」と記され、舊唐書には、「新井の篇」に「花を賞する詩」も加へられてゐる。居易と親交のあつた佛光和尚の、その弟子からの傳聞を記録したといふ唐闕史によれば(白文公、この二篇の存在は疑ふべくもないが、當時の事情を詳に述べる「楊虞卿に與ふる書」(卷二)にも、居易はこれらの詩について言及することを避けてゐるから、もともと故意に文集には採録しなかつたと察せられる。元稹が通州の宿舍で壁上に見出した「淅水の紅蓮一朵開く、千花百草も顔色無し。」といふ詩句を含む一篇は、元稹の書簡によつて、「十五年前、及第せし初の時、長安の妓人の阿軟に贈りし絶句。」(卷一五、微之到通、州日授館未安云云)であることを居易は想ひ起したのであるが、このやうな一群は、盼盼といふ知人の妓女に贈つた詩句が「燕子樓の序」(卷一)に見えるやうに、たとへ記録されてゐたととしても、編纂の際に排除されたと考へられる。今本に見えぬといふのみではなく、「其の餘の雜律詩は、或は一時一物に誘はれ、一笑一吟に發し、率然として章を成す。平生尙び所者に非ず。但だ親朋合散の際、恨みを釋き懼みを佐ける其を取るを以に、今銓次に間、未だ刪り去るこ

と能はず。他より時我が爲に斯文を編集する者有らば、之を略しても可なり。」といふその態度から文集に採録されなかつたものと思はれる。編集に當つては確かに選擇が施されてゐたと認められる。とすれば、文集に收められた以外に、かなりの作品が存してゐたことに疑ひない。ただかうしたきびしい選擇は、長慶集まで、特に元和十年以前に限られてゐたものゝやうである。「殷協律に寄す」(卷五)の詩の自注に、「予れ杭州に在りし日、歌有りて、黃鸝と白日を唱ふを聽けと云ひ、又た詩有りて、紅を著て馬に騎るものは是れ何人ぞと云ふ。」と見えるが、その「歌」とは「醉歌」(卷二)であり、その「詩」とは「薪を賣る女に代りて諸妓に贈る」(卷二)といふ律詩であり、ともに今本にも載つてゐる。もとよりそこに見えぬ作品もある。「太湖石の記」を含む卷七十一から七十五までの作品が少數しか存しないことが何よりも明瞭に示してゐる。しかし能ふ限り追究しても、意をもつて採録をしなかつた事實はなく、又さうした痕跡も探し得ない。文學への態度が推移し、作品量に對する誇負が生じるやうになつてからは、文集に取上げられるのが自然であらうから。従つて文集に收録されなかつた作品はかなりあるが、既に長慶時代に選擇に洩れたもの、亡佚したもの、或は即興口號のものが大半を占め、これらを除けば殆んどが録載されたこととなる。

しかしこの三千八百四十首を「集に五本有り。」といふその五種の集本が等しく記録してゐたのではない。かつて「蘇州南禪院の白氏文集の記」に、「七帙、六十七卷、」を掲げ、「故に、其の集、家藏の外、別に三本を録して、東林聖善の兩寺に置き、南禪院にも納めると述べてゐたが、これによれば、先に六十卷を送つた東林寺と、六十五卷を送つた聖善寺とに、ここで南禪院に納めようとしてゐる六十七卷本を再び納めたやうにも見える。このことに言及する從來の二三の研究は殆んどさうした見解をとつてゐる。だがこの見解は簡單には認め難い。「備に聖教を聞き、深く因果を信じ、來業を結ばんことを懼れ、前非を知るべきを悟る。」その「故に」三本を寺藏に奉納すると述べるのみであつて、「其の集」は六十七卷本と限られはしないからである。しかも前二本とは七卷と二卷との差に過ぎず、納期も四年と三年との隔りしかない。東林寺本と聖善寺本とはそれぞれ六十卷と六十五卷に止まつてゐたと考へられる。ただ東林寺には、後に後集が送られてゐたから七十卷の内容だけには具つてゐたが。この三本はどこまでも形成の途上にあつたのであるから、當時までの作品を載せたものであり、以後の作品には及ばないのである。三本は最後まで續けられたものではない。「南禪院の白氏文集の記」にはその外に一本が記されてゐる。「家藏」のそれである。「後記」に「一本をば姪の龜郎に付へ、一本をば外孫の談閣童に付へ、各々家に藏めて後に傳へしむ。」といふ二本が見えるが、これが先の「家藏」本の延長である。「姪の龜郎」とは、「弟を祭る文」(卷六)に、「龜兒頗る女性有り。吾れ毎に自ら詩書を教ふ。三二年間、必ず學に應ずるに堪へん。」

と記し、又「他日、吾が文集と及ともに、同じく龜と羅に付あたへ收め傳へしめん。」とも記す、弟行簡の遺子である。「外孫の談閣童」とは、「羅」と呼ばれてゐる、居易の娘の阿羅の、四門博士談弘謨に嫁して得た兒子であり、「談氏の小外孫の玉童」(卷六九、玉、(那)は)を指すものと思はれる。龜郎と、阿羅を通じての孫とに文集を傳へようとする意志は、早くから居易にあつたのである。阿崔と名づけられる男兒が出生した後は、ひとへにそこへ心を傾けてゐたが、やがで三歳にして死歿した爲、居易の期待は消え去つた。かくて再び龜羅にその心が向けられてゐた。龜郎は行簡の死後、居易の許で育養され、談弘謨の卒後、玉童も居易に引取られてゐたが、その二人に與へた集本は、その故に全く同種のもものと察せられる。しかもそれらは家藏本であるから、七十卷より後の卷軸もそこに加へられてゐたのは當然であらう。そしてこの二本に「後記」が附されたのである。三千八百四十首を載せた集本はこの二本である。岑仲勉氏は三寺に在るものも七十五卷本と斷定してゐるが首肯し得ない。

集本はこの外にもあつた。「日本、新羅の諸國、及び兩京の人家に傳寫せる者」である。しかしそれは居易の認めるものではない。「此の記の在ならず」といはずを得ないのは、訛誤があり、部分的でもあつたからであらう。更に「元白唱和因繼集」と「劉白唱和集」とあるが、それらは居易の作品のみを收めたものでもなく、居易の作品にしても元稹や劉禹錫のそれに對應する一群のみであつた。なほ「洛下遊賞宴集」がある。その名が洛中集に通ひ、しかも卷數は同一であるから、洛中集の別名かと思はれる。「凡およそ觀寺丘墅に泉石花竹有ほれ者、遊あそばざることなく、人家に美酒鳴琴有ほれ者、過よらざることなく、圖書歌舞有ほれ者、觀みざるることなし。」(卷六、醉しやく)といふ生活から産出された洛中集には、「遊賞宴」の三字が加へられても不都合はない。洛中集の外にこの書名を持つものがあるとすれば、東林・聖善・南禪の三本を「後記」に採り上げつつ、香山寺への奉納本のみを除いたこととなり、初めから各種の詩文集を網羅して記録しようとする意圖から離れる結果となる。「洛下遊賞宴集」は、洛中集と同じものと定めても危険ではないであらう。かうした唱和集の居易の作品や詩集の内容は、悉く本集に吸収されてゐる。唱和集について見ると、それは本集とは別に編纂されてゐた。「元白」に例をとれば、「曩者唱酬し、近來因り繼ぐこと、已に十六卷にして、凡て千餘首なり。」と記した「微之に和する詩二十三首の序」は、太和二年の春の作であるから、その時まで定本的な形で「因繼」の部も存してゐたのである。後集の第一次編纂は「後序」の作られたその年の秋である。唱和集に定着する方が、量の堆積を待つて分類編次される本集に定着するよりも早いのである。とすれば、後で編纂される本集に、先に成つた唱和集の作品が、殊更に退けられる筈はない。本集は、唱和集に於ける居易の作品を悉く含んでゐるのである。洛下遊賞宴集を洛中集と見れば、その十卷は、洛詩として整理された第一部と、それから後の第二部とに分れるが、

第一部はそれが編集された太和八年の翌年、本集の六十卷本が成つた時、そこへ編入され、第二部はそれが編集された開成五年の翌年、本集の七十卷本が成つた時、そこへ編入されてゐた。洛中集「八百首」は本集に遺すところなく吸収されてゐたのである。七十五卷の文集は二つの唱和集に於ける居易の作品と洛下遊賞宴集の作品を包含してゐた。「其の文は盡く大集の内に在り。」と明言し得たのはこの故である。ここに「大集」といふのは、先づ兩唱和集や洛下遊賞宴集の、別行する三集に對して多量である七十五卷の本集を意味し、更には七十卷本を遙かに越える作品量を收容し、東林寺本等の三種の文集をその中に包攝する七十五卷の完本を意味するのである。文集といふ言葉を用ひなかつたのは三本に對して混亂を避ける爲であらう。家藏の二本以外に七十五卷本はなく、七十五卷本以外にこの當時それより「大なる集」は存すべくもない。しかも、後記が附されたのは紛れもなく七十五卷本であるから、大集はどこまでもその集本を意味するのである。汪立名も「二本疑ふらくは即ち記中に云ふ所を指すならん。」と推定してゐた。がだがいまはそれを斷定に代へ得る。先輩には汪説にすら疑義を挿む意見もあるが取るべきものではない。ここに七十五卷本は、居易の撰述したあらゆる本をその内に持つこととなる。それは収載し得る限りの作品を網羅したものでつた。もとよりこの本は今見るべくもないが。

「若し集内に無くして、名を假りて流傳する者は皆な謬り爲りしもののみ。」と言ひ切れたのはこの故である。「皆な謬り爲りしもののみ。」といふ語には、「名を假りて流傳する者」への反撥がある。長慶集の序で、「名姓を盜竊し、苟に自ら售らんことを求むるに至る有り。離亂間廁すること奈何ともす可き無し。」と元稹は記してゐたが、さうした事象はその後も衰へなかつたであらう。それに對して責任を持つ限度としてこの七十五卷本を定本としたのである。七十五卷本は手定の全集である。白氏文集は後記を附されてここに完成したのである。

三

かつて若き日を回想しつゝ居易はかう記してゐた。「十五六にして始めて進士有るを知り、苦節讀書し、二十已來、晝は賦を課て、夜は書を課て、間に又た詩を課つ。」と。その頃の作品は學試を目標として制作されたものであつた。やがて、「文章は時の爲にして著はす合く、歌詩は事の爲にして作る合し。」といふ信念が確立し、遂に詩は、「人の病を救ひ濟け、時の闕を裨け補ふ」意圖に於いて産出された。一は文學の外に目的を置き、一はその内に目的を懷いてゐた。文學は明確な目的に規制されてゐたのである。行卷のことや十五卷の詩集もこの立場に成つたものであつた。しかし間もなくさうしたものの支配から超脱する。「新篇は日に成れども、聲名を愛む是ならず。舊句は時時に改むれども、性情

を悦ましむるに妨げ無し。」と述懐する境涯に出て來たのである。文學は他に奉仕するものではなくして、それ自體で目的たり得るものとなつたのである。制作は愉悅の體驗であり、作品は感興の流露となつた。長慶集の編纂はこの時期の頂點で實現したのである。だが暫くすると、時に湧上つてゐた自己目的にも似た文學への懷疑が徐々に膨んで來る。そして遂に「今生世俗の文字の業、狂言綺語の過を以つて、轉じて將來世の佛乘を讚するの因、法輪を轉ずるの縁と爲さん。」といふ本願を立てるに至り、文學は棄却されようとした。觀念的立場に在るとしても、「業」や「過」と意識されてゐたのである。後集二十卷の編成は、懺悔の心境の延長に於いて可能となつたのである。しかし佛者になり切るを得ない居易は、「少年我が蹉跎たるを笑ふこと莫れ、聽け我が狂翁一曲の歌を。」と自嘲しつゝも再び業過に流されて行かざるを得なかつた。そこに文學を生涯の事業とした回顧が起り、七十五卷の編定が完成したのである。文學に對する態度は幾度か轉變した。文學の存在意義を主張し、さうした方向に全力を注ぎ、或は理由を拒否して文學に没頭もした。時には文學そのものを否定しようとすることもあつたが、その底には文學への切ない愛著があつた。七十五卷の成立には居易の一生を貫ぬく文學への眞實がその基盤に在つたのである。

この眞實はそのまゝそこから産出された作品への愛著へ伸びてゐた。策林を編成しては、「凡そ應對せ所者は、百に其の一二をも用ひざるも、其餘の目も精力を致せし所なる以に、棄捐すること能はず。次でて之を集め、分ちて四卷と爲す。」と序してゐた。模擬答案にすぎぬものゝ、努力して制作したものであつた爲、居易は棄て去ることが出来なかつたのである。十五卷の編集の時、「雜律詩」は輕視すべきものであつたが、「親朋合散の際、恨みを釋き、懼みを佐ける其を取る以に、今銓次に間、未だ刪り去ること能はず。」として收載してもゐた。價值低しと認められるものも採らざるを得なかつたのである。作品へのかうした心情は、産出された悉くを記録に留めて行くやうになる。江州へ來てから二、三年、「書を著して已に帙に盈つ。」(卷七)と述べ、忠州に向つては「謾りに詩を寫して卷を盈たす。」とも記してゐた。續々と産出される作品は、制作からさほど隔らぬ時期に、既に卷軸に定着され書帙として整理されてゐた。さうした卷帙は、編纂に當つて自然ほどそのまゝに文集の中へ繰り入れられることとなる。かくて作品は殆んど遺すことなく文集へ位置したのである。堅牢な書櫃を作り、しかもそれを書齋の帷の前に置き、開閉さへも自らの手でなしたその配慮も、「誠に終には散失することを知るも、未だ遽に棄捐するに忍びず。」(卷六三題)といふ作品への愛著の故であつた。東林寺に文集を納めた時にも、「請ふらくは、本寺の長老及び主藏の僧の、遠公の文集の例に依ひて、外客に借さず寺門を出さざること。」と記してゐたが、それも散佚を懸念した爲とも思はれる。作品への深い愛が、文集編纂に全作品を收容するに至つたのである。七十五卷が

選集ではなくして全集として成立し、三千八百四十首といふ類ひ稀な作品量を収載し得たのは、居易の内部に尋常ならぬ作品愛があつたからである。

このやうな作品への態度は既に編纂の實質を形成してゐた。常に一應の整理が、或る期間に於いて完成してゐたからである。しかしさうした實質を文集といふ形式に組織するには理由があつた。元稹が自己の文集を編成して寄せた詩に對して、居易が酬ひた詩の中にはかうした言葉もあつた。「各々文姫有りて才に稚齒、俱に通子の餘塵を繼ぐ無し。琴書何ぞ必ずしも王粲を求めん。女に與ふるは猶ほ外人に與ふるに勝れり。」元稹と共に居易は文集を授くべき嗣子の無いことを歎いてゐるのである。その故にこそまだ齡幼い女兒に望みを向けたのである。孫の代にでも自己生涯の事業を繼がせたいといふ意志があるからである。やがて阿崔が誕生すると、「弓冶をば將に汝に傳へんとす、琴書もて吾を墮す勿れ。」(卷五八)と命じてゐた。だがその阿崔が三歳で逝き、居易は「文章は十帙官は三品なるも、身後には誰にか傳へ誰をか庇蔭せん。」と悲歎してゐた。遺業を受繼ぐ者の死を哭してゐるのである。再び外孫へ期待をかけなければならなかつた。七十卷の文集を編成する前後、「外翁は七十孫は三歳、笑つて琴書を指し傳へ遣めんと欲す。」(卷六九談氏)と潜かに洩してゐた。兒孫は父祖の遺業を繼承することによつて、それを顯彰しなければならぬものである。まこと前人の文集は多く兒孫によつて編定されてゐた。「尙書刑部侍郎、贈右僕射、孫逖文公集の序」(顔魯公文)で顔次して二十卷と爲す。」と記すのもさうした形式を物語るものである。だが居易にはその事を擔當すべき嗣子がなかつた。外孫に期待したけれどもあまりにも幼かつた。居易は自らその事に當らなければならぬ。五十卷の長慶集も、この心境から編成されたものであり、七十卷の白氏文集もこの事情によつて自撰されたのである。白氏文集七十五卷の編定を居易自らはねばならなかつたのはこの理由による。かくて編纂の方式がそれまでに例の多くない自撰となり、「後記」も自記となつたのである。

しかし、自らの手によつてでも編纂しなければならぬといふ意志はどこから突上げて來たのであらうか。その初め居易は、「仗る所の者は文章のみ。」と言ひ放つてゐた。たとへそれが舉試の爲にする言葉であつても、そこには比ひ少い自信があつた。やがて半生を回顧して、「始つて名を文章に得、終は罪を文章に得たり。」(卷二八與)と書き記してゐたが、文字を貫いて流れるのは詩文に對する搖ぎない自負であつた。長慶集が編成される直前に、「制は長慶従り辭高古にして、詩は元和に到りて體變新しぬ。」と詠じてゐた。叙述の上では元稹に傾きつつも、その底には

自己の文學への強い主張が漲つてゐた。この評價はただ居易の心理に於いてのみ存在してゐたのではない。その文學の眞實の理解者であつた元稹も早くよりそれを承認してゐた。一般に於いても舉試の詩賦や策判は範文として貴重され、更に長恨歌や秦中吟等の諸篇は廣く流傳され、詩文にわたつて書肆の商品ともなつてゐた。客觀的にも價值は確認されてゐたのである。それが自覺されると、氣負つた價值意識は表面から退き、代つて多産的な制作の誇負が現はれる。後集第一次の編纂を終へて、「拙音狂句亦た已に多し。」といふ作品量の満足を示すことから始まり、元白唱和因繼集について唱和の多きこと「古従り未だ有らず。」(卷六〇因)といふ誇負となり、洛詩の「作ることは曾に數千首ならず、以つて其れ多し。」といひ切るまでに至つてゐた。文學を生涯の事業とする者の、作品量に對する大きな誇りである。それも裏返せば自己の文學的能力に對する信仰から發せられたものであつた。さうした信念はただに當代に於けるのみではなかつた。かつて強く主張した諷諭の詩が一般から攻撃された時、唯一の知己元稹に「千、百年の後、安んぞ知らん、復た足下の如き者の出でて、我が詩を知愛すること無きを。」と書き贈つてゐた。それはそのまま「世間の富貴には分無かる應きも、身後の文章には名有る合し。」と詠じるその下句に表現される觀念ともなる。後集第一次編纂の前年、所懐を述べた詩の中にも、「詩は身後の名を留めむ。」(卷五五授秘書監并賜金紫關吟小酌偶寫所懐)といふ文字が見える。自信は後世にも向つてゐた。その文學に時間を越えた絶對の價值を認めてゐたのである。七十五卷の全集を手定して、「若し集内に無くして、名を假りて流傳する者は、皆な謬り爲りしもののみ。」といひ、偽作を排除し自作をそれから區別しようとしたのも、實はかうした心情からであつた。居易の編纂には價值意識の昂揚が伴つてゐた。後世にまで傳へらるべき文集の編纂には、常に濃淡の差こそあれこのやうな意識がある。「揚州功曹蕭穎士の文集の序」(文苑英華卷七〇〇)で李華は、「後の文を爲る者、取りて以つて法と爲す。」と述べ、その故に編纂し序文を記したのである。居易の文集編纂もかうした立場でなされたものであつた。白氏文集を積極的に成立せしめたものこそ、居易の自己の文學に對する動かすべからざる價值意識であつた。

本篇は、京都東方文化研究所に於ける、文部省人文科學研究費による研究課題「白氏文集の校注」の基礎研究として、昭和二十二年にその草稿を成したのであるが、最近に至り漸く舊鈔金澤文庫本の形態をほぼ明らかにし、かつての見解を確め得て、いま字を變へ段を削り節を増したものである。稿を改めるに際し、京大人文科學研究所に於ける研究班の平岡先生の示唆に富む御助言と入矢先生の綿密な御注意とを深く謝する。